

一般区分

優秀賞

大阪府

人は誰かの支えになれる

糀谷 終一

昭和55年8月8日。交通事故で私は首から下が動かなくなりました。まだ33歳。これから夢をかなえようとしていたときの、まさかの出来事でした。

ベッドに横たわり、天井を見つめながら毎日考えました。「これから先、いったい何ができるんやろう」と。現実を受け止めきれず、ただ時間だけが過ぎていきました。

その後の5年間は、リハビリに明け暮れました。長く、苦しい日々でしたが、そんな中でも、思いがけない出会いに、何度も助けられました。

同じ病院でリハビリをしていた若い車いすの男性が、ある日ふいに声をかけてくれました。明るく、冗談まじりで。「この人、なんでこんなふうに笑えるんやろう」と、最初は戸惑いました。自分にはそんな余裕、なかったからです。

でも、彼の言葉の端々から、自分と同じような悔しさ

や痛みが伝わってきました。それに気づいたとき、自分の中にあった分厚い壁が、少し崩れた気がしました。「できないことを数えるより、できることを見つけていこうや」

その一言が、胸に深く残りました。それから、少しずつ前を向けるようになり、リハビリにも気持ちが入りはじめました。

退院後、私は「頸損友の会」という小さな集まりを作りました。同じように障がいを持つ人たちが、気軽に話せる場所がほしかったからです。

活動を続けるうちに、障がいのない人たちとも出会うようになりました。大学生のボランティア、地域の主婦や高齢者の方々。最初はぎこちなかったけれど、顔を合わせるたびに、少しずつ打ち解けていきました。笑顔が増え、気がつけば、なんでも話せる仲になっていました。

ある日、道明寺南小学校での交流会で、一人の男の子が言いました。

「車いすの人って、ただ足が動かへんだけなんや。心は一緒なんやな」

その言葉に、胸がじんわり熱くなりました。子どもは本質をちゃんと見ています。障がいがあるかどうかより、大事なのはどう心を通わせるかや、と改めて思いました。

その後、「アジア障害者友の会」を立ち上げ、フィリピンやタイの障がい者施設を訪ねました。言葉が通じなくても、笑顔や手のぬくもりで心は通じます。

フィリピンの施設で、ひとりの少年がそっと私の手に花を握らせてくれたことがありました。そのとき、「人のやさしさには国境も、障がいの壁もない」と、心から思いました。今は、地域のバリアフリー活動や、認知症サポーターの養成にも取り組んでいます。障がいがあっても、ただ「助けられる存在」じゃない。誰もが誰かの支えになれる。これまでの出会いや経験が、そう教えてくれました。今は週に2回、デイサービスに通っています。ヘルパーさんとの何気ない会話や、利用者どうしの笑い声が、日々の元気の源になっています。

障がいは、たしかに不便です。でも、不幸ではありません。

せん。

人と人が、心を通わせ、助け合い、笑い合える——それこそが、私が歩んできた道で得た、何よりの宝物です。

私の「心の輪」は、今も少しずつ広がっています。手と手をつなぎ、声をかけ合い、心を寄せ合えば、きつとどんな壁も越えられる。私は、そう信じています。

一般区分

優秀賞

熊本県

私は障害とともに生きていく

わたし　しょうがい

田口　慎一郎　たぐち　しんいちろう

「貴方の症例は発達障がいに該当します」

医師から告げられたその言葉に、当時の私はハンマーで殴られたような衝撃を受けた。仕事でミスが続き、上司から『おまえは普通ではないから病院に行け』と言われての受診だった。幼少からの学校生活や学生時代のバイトではなんの問題も無かったのに、突然評価が一変した。別に私個人は障がいに対し差別的な意識を持っていたつもりはない。ただまだ組織や社会のノウハウがない時期での認定だったから、合理的配慮の名の下に、突然それまで行っていた仕事を取り上げられたのは辛く、望まぬことも色々起きた。

「君が障がいを隠してここにいるのは詐欺みたいなものだ」

少し語句をマイルドに変えてはいるが、こんな言葉を言われたこともあった。

最初の内は私も妻もどうしていいか分からず、いく

ども喧嘩をした。忘れ物をするたびに、「私は一々配慮なんてしてられない！」と妻は癇癪を起こした。私だってそうしてもらいたく、しかし無情にも、ノートに失敗の数を記録していくと、確かに私のミスや忘れ物の頻度は普通の人の3倍は多かった。

だけど私は諦めたくはなかった。自分が障がい認定される前から、障がいを持つ人を他人より劣っているとは思っていなかったからだ。

思い出していたのは学生時代に打ち込んだ柔道の恩師が語った彼の師の話。大師匠にあたるその人は、目が殆ど見えないのに相手の重心や脚の動きを見切る達人、俗に言う『心眼』の持ち主だったそう。生物はある部位を喪失すると、残された部位の使用頻度が上がり元よりも強靱になりやすい。身体障がいでもこう

した『成長』を遂げた人の話はよく聞いた。では『脳の一部の機能だけが人と異なる』自分の成長するものは何なのか……。私は私と同じ症例を持つ人について色々調べ、本を読みあさった。

その結果、多くの天才・偉人とされる人の中に私と同じ人がいた。普通感覚や視野は持てない。けどだからこそ見える狭い視野に超人的な集中力を発揮し、前人未踏の領域まで達して結果を出した人たちだ。

彼らのことを調べると、皆自分の才能を伸ばすためのたゆまぬ努力と、必ず周囲の協力者への感謝があった。親や学校の先生、チームの仲間、そして配偶者……。

私は妻にこのことを話した。別に自分を天才だと誇る訳じゃない。ただ自分にはもっと出来ること、そしてどうしても出来ないことがあることを知って欲しかった。妻はあっさり了承してくれた。というより妻も妻なりに対策を考えてくれたのだった。

それから私達夫婦の生活スタイルは徐々に変わっていった。妻は私が忘れ物をしやすいからと荷物持ちをしてくれたし、私が集中力が続かない日だという車の運転を代わってくれた。私も妻の代わりに文書を読み込んだりパソコン関係の手続をする時は積極的にしていった。生来活字の読み書きが好きな私はそういう

ことが得意だったし、改めて自分を見つめ直すと、そうした文章や情報関係の分野では、自分の記憶力や語彙力が妻よりもずっと秀でていることが分かった。

私生活が徐々に安定してくる頃には、職場の方もよりの射た支援をしてくれるようになった。『君はパソコンに強いから〇〇をお願いしたい』と頼られることが増え、そうしたチャンスには必死に期待に込めようと努力した。苦手分野でもなるべく腐らずに頑張り、自信が無いときは『終わりましたがミスが無い確認をお願いします』と言える体制ができた。結果として、障がい認定される前より落ち着いて仕事が出来るようになったと思う。

障がい者支援において、『障がいとは生まれ持った個性』という言葉をよく聞くが、ある意味では正しい。けど私はそこで止まってはとてもしないと感じている。健常者だって生まれ持った個性はあり、皆それを伸ばして武器として仕上げてはじめて社会で活躍していくのだ。ならば障がい者も同じであろう。視覚に頼らず世界を見る才能、腕力で脚と同じかそれ以上に椅子をこぐ才能、自分が好きなことに世界の誰よりも一生懸命になれる才能……。それらは社会で立派に必要とされる才能に違いない。

障がい者の方へ

貴方が持つのは人より劣っているだけのものではありません。必ずそれにより人より秀でる可能性を秘めたものなのです。だから腐らず、諦めず、前を向いていってください。

障がい者を身近に持つ家族・友人・職場の人達へ

彼らをただ劣った人と見ないでください。出来ないことと同じだけ、『彼らだからこそ出来ること』があるかもしれないのだから。

私は今、妻との間に子供も産まれて一家の大黒柱となった。もう障がいがある無しでいちいち迷ったり苦しんでいる暇はない。妻や職場の皆が私を支えてくれたように、私も妻子を支え、職場に恩返しをしなければならぬ。そのための武器が今の私にはある。

私は、障害^{さいのう}とともに生きていくのだから。

一般区分

優秀賞

徳島県

挑戦
ちようせん中 西 健也
なかにし けんや

ぼくの挑戦は、いくつかあります。その中で覚えている記憶と経験した事を話してみようと思います。

一つめは、下駄箱の片すみに見つけた黄色の小さなくつは、ぼくが始めてはいたくつでした。お母さんは、ずっと、ずっと保管していました。

このくつをはいて歩いたのは二才三カ月。二回目の冬。十一月でした。通勤途中に公園があります。歩き始めたぼくを、その広い場所でヨチヨチ歩きの練習に来ていたと、話すお母さんの笑顔は大好きです。

ぼくは、歩くのも、ものすごく遅かったし体も弱くて何度も入退院をくり返し成長がゆっくり、ゆっくりになってしまった。記憶はないけれど保育園の写真を見れば理解できる。

お友達は、歩いて散歩しているのにぼくだけが先生に抱っこされていた。

夏のプール遊びをしている写真もお友達とは何故か

は大きくぼくを包み込んでくれた温くもりでした。寄り添ってくれた保育園の先生に感謝致します。

先生が

「お母さん来たよ。」

と教えてくれました。ぼくは、慌ててお母さんの所に走っていききました。お母さんは、そつとぼくを抱きかかえ

「ごめんね。ごめんね。」

と言っていました。

その後の言葉は覚えていませんが、ごめんねだけの言葉は今もはっきり覚えています。

人の温くもり、思いやり、寄り添いは大切です。お母さんは介護のお仕事を二十年以上しています。人のお世話は中々できる仕事ではありません。ぼくは、お母さんを誇りに思います。人の漢字の意味を覚えてくれたようにぼくも、人に対して思いやりをもつ心をもたなければならぬと思う。困っている人を見かけたら勇気を出して声をかける。

困っている人がいても見て見ぬふりをして通り過ぎて行くのは何故だろうか。まるで他人事のように。お母さんは、このような場面にそうぐうしても見て見ぬふりはせず手を差しのべているタイプです。お母さんのようにぼくも勇気をもって挑戦したいと思います。

違っていた。プールの中で楽しそうにしているお友達。ぼくは、水をこわがってプールの外で先生と水遊びをしていたぼくがいた。お芋ほり、お散歩、運動会、おゆうぎ会、様々な場面でぼくだけが先生のとりにいた。

保育園で0才から6才まで過ごしてきた中で思い出に残ることがあるとするならば、いつも決まった時間にむかえにきてくれる母が待っても、待っても中々来てくれず、お友達が一人、又一人と帰っていく。寂しさと涙で先生のひざの上でいた。先生がその時、ぼくにこう言った。

「車はいっぱい」

ぼくの記憶では、雪が降っていたのは今も鮮明に覚えています。大人になればその意味は理解できますが幼少期のぼくには理解できなかった年令でした。

先生の膝の上は温かくギュッと抱きしめてくれた腕

嬉しい言葉は、人を幸せにしてくれる魔法です。

二つ目の挑戦は、おじいちゃんと練習した自転車の稽古です。最初は、一年生の時に自転車の稽古をしました。上手いかわず、自転車に乗ったまま倒れたのがきっかけとなり恐怖を覚えてしまいました。

中学校は、勿論、自転車通学。徒歩でも通える距離だがそう簡単には続かないだろう。

そんな矢先におじいちゃんが、ぼくの為を思って小学校最後の夏に自転車稽古を毎日してくれました。夕方涼しい時間帯に少しずつ練習をしました。転んでは起きあがり手も足も傷だらけにもなりました。上手いかない時は、自転車を乗りすてて泣きながら、おばあちゃんに愚痴を聞いてもらった。

おばあちゃんの言葉は、まるで魔法にかかったかのように。

「おじいちゃんは、いつも乗りすてた自転車をつれてかえってるんだよ」

「遠い所から。じいちゃんの気持ちも分かったり。今、逃げ出したらずっと逃げていく。今頑張らんといつ頑張るん。」

今でもその言葉はお覚えています。

それから、ぼくは毎日のように自転車の稽古を頑張って頑張って挑戦しました。弱音を吐かないために、

ぼくは努力を惜しまない。

夏休みが終る頃、補助輪なしで自転車を一人前に乗れるようになりました。これも全ておじいちゃん、おばあちゃん、お母さんのおかげです。

この挑戦がなければ今日のぼくは戦う事はなかったはずです。お仕事は、毎日が目まぐるしく忙しいけどやりがいのある仕事です。

おじいちゃんが教えてくれた挑戦は、ぼくにとって大きな財産です。

おじいちゃん。ありがとう。頑張っているぼくをお空から見えていてね